

長崎女子短期大学におけるアセスメントプランの構想

武藤 玲路・濱口 なぎさ

Concept of assessment plan at Nagasaki Women's Junior College

Ryoji MUTO・Nagisa HAMAGUCHI

キーワード：アセスメントプラン、ルーブリック、フィードバック、学習意欲、自己調整学習

1. 問題と目的

1.1 自己調整学習とフィードバックによる学習意欲の向上

筆者は、教育心理学の学習理論の領域で、「自己調整学習による学習意欲の向上」について研究している（武藤、2020・2021）。自己調整学習を導入した秘書検定試験の受験対策講座では、女子短大生の学習意欲に上昇の傾向が認められた（江頭・武藤、2021）。

最新・心理学辞典では、「自己調整学習とは、学習過程のすべてに学習者自身が能動的にかかわり、自己の認知活動や行動をコントロールしながら、効果的に学習目標を達成していこうとする学習スタイルのことを言う。（中略）生涯学習を前提とした場合には、学校教育に求められる役割として自己教育力の育成が重視されることになる。自己教育力は主体的に学ぶ意志、態度、能力を包括した概念であり、自律的に学習し自己を向上させ社会の変化に主体的に対応できる能力とされる。このような教育・社会における動向を踏まえて、学習の自律性を理論上の基本とする自己調整学習の研究が盛んに行なわれるようになった。」と説明している。

阪野は（2020）は、自ら学ぶ力を育てる自己調整学習について、「自己調整学習とは、『動機づけ・学習方略・メタ認知』の3要素において、自らの学習過程に能動的に関与して進められる学習方法と表現できる。まず、『動機づけ（モチベーショ

ン)』とは、学習を進めるにあたってのエネルギーとなる心の働きを指し、『自分ではできる』という自己効力感や『成績を上げたい』という学習意欲などを指す。次に、『学習方略』とは、効果的な学習をするための学習方法や工夫のことである。最後に、『メタ認知』とは、自分自身を高い視点から見つめ直し、自らの思考や認知を適切にコントロールする働きのことである。『自分は何を理解していて、何が苦手なのか』を、正確に捉え、学ぶべき箇所を明確にする力である。自己調整学習では、『予見（見通し）』『遂行コントロール（学び深める）』『自己省察（振り返り）』の3つのステップが循環的に行われて、それぞれのステップに、『動機づけ・学習方略・メタ認知』が関係する。」と述べている。

また、土屋（2019）は、「自主性・自己調整学習を促すフィードバック実践」をテーマとしたFD研修会の中で、学修成果のフィードバックが学生の自己調整学習と学習意欲を向上させることを報告している。従って、循環的で継続的な自己調整学習では、学修成果の明確な評価基準と適切なフィードバックが、学生の「メタ認知」に強い影響を与え、自己効力感や自己肯定感、自信、意欲を大きく左右することになると言える。

1.2 教学マネジメント体制におけるアセスメントプランの重要性

文部科学省は、平成15（2003）年度からGP事

業（Good Practice、優れた取組）に取り組み、教育の質の保証と向上に向けた大学教育改革の事業を行った。具体的には、「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）」及び「質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）」を実施して、財政的なサポートや幅広い情報提供を行い、各大学等での教育改革を促進した。

また、認証評価制度は、平成16（2004）年度に第三者評価の名称で導入された。現在では学校教育法に基づいて、国公私全ての大学、短期大学、高等専門学校に対して、7年以内に1回、文部科学大臣の認証を受けた評価機関（認証評価機関）による第三者評価（認証評価）を受けることを義務づけている。これは、国による事前規制を弾力化しつつ、大学等の教育研究の質の担保を図るため、設置後の大学等の組織運営や教育研究活動等の状況を定期的に事後確認する体制を整備する観点から導入された。

さらに、平成25（2013）年度には、私学助成の改善とさらなる充実を図り、私立大学の質の促進や向上を目指して、「私立大学等改革総合支援事業」がスタートした。この制度は、すべての学校法人に助成金を交付するのではなく、教育研究や財務状況に応じて、「建学の精神を生かした学士課程教育の質向上」「地域再生の核となる大学づくり」「産業界などのステークホルダー」「国内外の大学等と連携した教育研究」といった全学的な改革を推進している私立大学に対して、経常費・設備費・施設費を一体として、より重点的に支援を行うことを目的としたものである。

また、平成26（2014）年度からは、「大学教育再生加速プログラム（AP：Acceleration Program、加速プログラム）が実施された。これは、これまでの特色ある教育を支援する「GP事業」等の教育改革を踏まえて、わが国の高等教育に共通の課題に対して取り組む大学を支援することにより、大学教育の質的転換の加速を促し、大学の人材養成機能の抜本的強化を図ることを目的とするものである。

そして、大学改革の一環として、平成29（2017）

年度からは、すべての大学に対して、「入学者の受入れに関する方針」（アドミッション・ポリシー）、「教育課程の編成及び実施に関する方針」（カリキュラム・ポリシー）、「卒業の認定に関する方針」（ディプロマ・ポリシー）という「三つの方針」の策定と公開が義務づけられるようになった。この指針の中で、大学等の教学マネジメントや内部質保証の確立には、従来のアセスメントポリシー（学修成果の評価方針）をより具現化したアセスメントプラン（学修成果の評価計画）の必要性を示唆している。

最近では、令和2（2020）年に中央教育審議会大学分科会より「教学マネジメント指針」が公表された。この指針のコンセプトは、『供給者目線』から『学修者目線』への転換であり、「学修者本位の教育の実現」という理念がベースになっている。指針の前文では、予測困難な時代において学生が卒業後も学び続ける必要性を指摘している。また、自ら目標を明確にして主体的に学修に取り組む「自律的な学修者」を育成するため、大学は、自学の教育が学生に必要な資質・能力を身につけさせる観点で最適化されているか、学修者目線で捉え直す必要があるとしている。さらに、『三つの方針』を通じた学修目標の具体化」「授業科目・教育課程の編成・実施」「学修成果・教育成果の把握・可視化」「教学マネジメントを支える基盤（FD・SDの高度化、教学IR体制の確立）」「情報公表」の5つの章で、大学に期待される取り組みや知っておくべき情報を示している。

上述の文部科学省のいずれの事業においても、学生の学修成果の評価について、その目的、方法、基準、可視化などを定めた学内の方針であるアセスメントポリシーと、その方針に基づいた具体的な計画であるアセスメントプランの策定と履行が含まれている。そして、個々の授業科目において、学内の方針に基づき、成績評価の方法・基準などをカリキュライフやシラバスに明示し、学生の学修成果を測定・評価・可視化することで、学生の内発的な学習意欲と自律的な学習行動が育ち、教学の体制を改革・改善し、向上・充実させていくことを提唱している。

このような、教学マネジメント体制が機能しているアセスメントの先進校では、教学IRデータのアセスメントプランが、学習支援や学生支援の向上・充実にとって、高い有用性と利便性を有するように設計されている。その多くは、上述のような文部科学省の支援事業に採択され、潤沢な補助金によって、学務システムや学習支援システムを専門の業者に委託して導入したものである。そのため、多種多様な大量のIRデータを多角的で体系的に分析し、誰にでも理解できるように可視化する高度な機能が備わっている。これによって、教職員は、煩雑なデータ処理から解放され、可視化されたデータを有効に活用した教育の改革・改善に専念することができるようになっている。

1.3 本稿の目的

武藤（2016）は、「長崎女子短期大学の自己点検・評価における学修評価システムの構築」において、独自の手法でアセスメントプランの策定に取り組んだ。しかし、評価の目的と活用方法を明確にしていなかったことと、評価の観点と尺度と基準からなるルーブリックを導入していなかったため、客観性と実用性に欠けており、教育の改善に活用するまでに至らなかった。そして、現時点においても国からの潤沢な補助金の用途はなく、教学マネジメント体制やアセスメントプラン、学修成果の評価システムが構築されていないため、学生の学修成果の到達度や学生支援の満足度を十分高めるような支援ができていない。

そこで本稿では、長崎女子短期大学のアセスメントプランを、先進校の事例を参考にして独自に考案し、オリジナルの評価システムを構築することとした。具体的には、①教学マネジメント体制の構想、②アセスメントプランの構想、③学修成果の評価基準の策定、④教学IRデータの可視化と活用法、について提案することを目的とした。

これにより、学生がより客観的に学修成果をフィードバックすることができ、授業の到達目標と学習方法を明確に把握できるため、自己効力感や学習意欲の持続・促進につながると考えた。

2. 評価の方法と活用

教学マネジメント体制とアセスメントプランの策定に当たっては、主に日本高等教育開発協会と株式会社学びと成長しくみデザイン研究所が開催した「カリキュラムコーディネーター養成研修会・評価編テキスト」を参考にした。

2.1 教学マネジメント体制の構想

教学マネジメント体制とは、高等教育機関において、教育目標を達成するための方針を定め、教育課程の実施に関する内部組織を整備し、教育を実践するとともに、評価・改善を図りながら教育の質の向上を図る、組織的な内部質保証のシステムを指す。図1は、長崎女子短期大学における「教学マネジメント体制の構想」で、内部質保証の流れを示している。

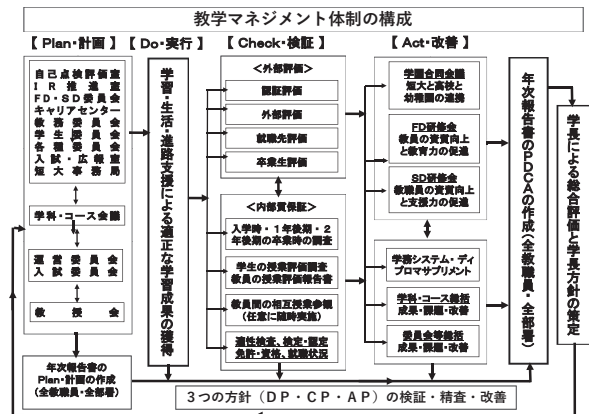


図1. 教学マネジメント体制の構想

2.2 アセスメントプランの構想

アセスメントプラン（学修成果の評価計画）とは、中央教育審議会（2020）が提唱した評価計画のことであり、アセスメントポリシー（学修成果の評価方針）に基づいて、評価の種類と方法を具体的に示したものである。以下の図表は、長崎女子短期大学の「3種類のアセスメントプラン」である。これに基づいて、実際に学修成果の評価を行う。

表1. アセスメントプランA「評価レベル別の評価時期」

評価レベル	入学前/入学時	在学時	卒業時/卒業後
	アドミッションポリシーの検証	カリキュラムポリシーの検証	ディプロマポリシーの検証
短大レベル (機関)	入学試験 入学前課題 本学入学時調査	本学在学時調査 JCKK 在学時調査 キャリアステップ	本学卒業時調査 JCKK 卒業時調査 ボランティア調査 就職先調査 卒業生調査
学科レベル (教育課程)	入学試験 入学前課題 本学入学時調査	本学在学時調査 JCKK 在学時調査 キャリアステップ	本学卒業時調査 JCKK 卒業時調査 ボランティア調査 就職先調査 卒業生調査
科目レベル (授業)		学業成績・GPA 学習成果の項目 授業評価アンケート 実習評価	

(1) アセスメントプランA「評価レベル別の評価時期」

表1のアセスメントプランAは、学修成果の評価レベル別の実施時期である。評価レベルには、短大レベル（機関）、学科レベル（教育課程）、科目レベル（授業）がある。それぞれ異なる時期に評価を行う。

(2) アセスメントプランB「調査種類別の評価方法」

表2のアセスメントプランBは、調査の種類別の評価方法である。この方法に従って評価をする。

表2. アセスメントプランB「調査種類別の評価方法」

調査の名称	区分	時期	対象	評価者	手法	内容	結果の活用方法
1 入学試験	入試関係	11～3月	受験生	教員	面接試験 筆記試験等	APの学習成果/適性・社会性	入学判定 授業改善
2 入学前課題	授業関係	12～3月	合格者	教員	筆記試験等	学力の3要素関連の課題	授業改善
3 学業成績/GPA	授業関係	1・2年次前・後期	1・2年生	教員	筆記試験 実技試験等	科目別の成績/GPA 単位取得率/資格取得率/卒業率/就職率	授業改善
4 学習成果の項目	授業関係	1・2年次	1・2年生	教員	5段階評価	科目別の学習成果	授業改善
5 授業評価アンケート	授業関係	1・2年次前・後期	1・2年生	学生	Web調査 5段階評価 自由記述	授業内容とレベル/教員の教え方/学生の取組み/授業の理解度/授業外学習の時間・時間帯/授業の総合評価・満足度	授業改善 カリキュラム改善 FD研修会資料
6 実習先評価	授業関係	1・2年次	1・2年生	実習先	5段階評価 自由記述	実習の態度/能力/実行力	授業改善 就職支援の改善
7 本学入学時調査	学内調査	1年入学時	1年生	学生	5段階評価 自由記述等	高校時代の学習成果に関する事、短大時代の学習支援/生活支援/就職支援に関する事/学習成果	授業改善 カリキュラム改善 FD研修会資料
8 本学在学時調査	学内調査	1年後期末	1年生	学生	Web調査 5段階評価 自由記述等	短大時代の学習支援/生活支援/就職支援に関する事、価値観/職業観/人生観に関する事/学習成果	授業改善 カリキュラム改善 FD研修会資料
9 本学卒業時調査	学内調査	2年後期末	2年生	学生	Web調査 5段階評価 自由記述等	短大時代の学習支援/生活支援/就職支援に関する事、価値観/職業観/人生観に関する事/学習成果	授業改善 カリキュラム改善 FD研修会資料
10 ボランティア調査	学内調査	2年後期末	2年生	学生	自由記述等	活動先/時期/内容/成果/感想	インターンシップの改善
11 JCKK 在学時調査	共通調査	1年後期末	1年生	学生	Web調査 5段階評価 自由記述等	高校時代の学習成果に関する事、短大時代の学習支援/生活支援/就職支援に関する事	ベンチマーク 強み・弱みの発見
12 JCKK 卒業時調査	共通調査	2年後期末	2年生	学生	Web調査 5段階評価 自由記述等	短大時代の学習支援/生活支援/就職支援に関する事、価値観/職業観/人生観に関する事	ベンチマーク 強み・弱みの発見
13 就職先調査	学内調査	卒後1年目	就職先	就職先	5段階評価 自由記述等	勤務の態度/能力/実践等 本学の教育への期待と要望	授業改善 カリキュラム改善 FD研修会資料
14 卒業生調査	学内調査	卒後1年目	卒業生	卒業生	Web調査 5段階評価 自由記述等	短大時代の学習支援/生活支援/就職支援に関する事、価値観/職業観/人生観に関する事	授業改善 カリキュラム改善 FD研修会資料
15 キャリアステップ	学内調査	1年次4月 2年次8月	1・2年生	実務教育出版	マークシート	社会人基礎力 職業適性診断 基礎能力(知能+学力) 職業興味志向 就職活動状況	授業改善 カリキュラム改善 FD研修会資料 ベンチマーク 強み・弱みの発見

(3) アセスメントプランC「学修評価のクロス構造」

図2のアセスメントプランCは、学修成果を評価したデータの分類に使う見取り図である。この図に従って、学修成果のデータを「量的評価/質的评价」と「間接的評価/直接的評価」に分類して、異なるデータ処理をする。

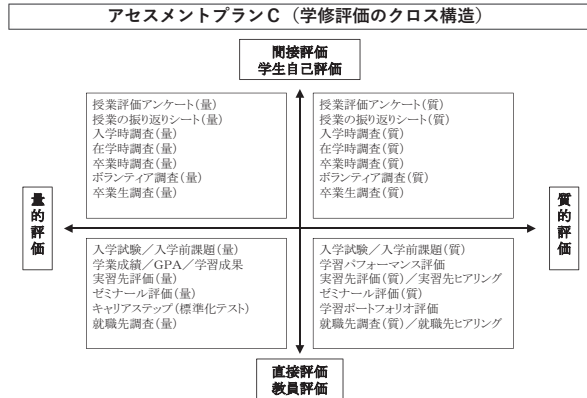


図2. アセスメントプランC(学修評価のクロス構造)

2.3 学修成果の評価基準

学修成果の評価基準は、アセスメントプランの中核となる重要な評価計画である。ここでは、長崎女子短期大学生活創造学科ビジネス・医療秘書コースの「学修成果の評価項目」と「ルーブリック」を示す。

ク」を示す。

(1) 学修成果の評価項目

表3の学修成果の評価項目は、教育目標とディプロマポリシーに関連する能力を、大分類・中分類・小分類に分けて活用するように構成している。通常は中分類の8項目の能力について、学務システムで可視化して活用することを想定している。

(2) 全科目共通のルーブリック

表4は、全科目共通のルーブリックである。ルーブリックとは、評価の共通言語と言われる代表的な評価ツールで、学修成果の評価基準としてよく使用されている。複数の「評価の観点」を数段階の「評価の尺度」で区切り、記述語で「評価の基準」を説明するため、基準が明確で評価の客観性が高い。また、観点と基準の記述語を変更すれば、他の科目のルーブリックも比較的楽に作成することができる。なお、このルーブリックには、中分類の評価項目だけ記載してある。

(3) 科目別のルーブリック

表5は、科目別のルーブリックの見本である。通常、中分類の評価項目の他に、配点割合、小分

表3. 学修成果の評価項目

「学訓」 教育目標	ディプロマポリシー(DP)が求める力	学修成果の評価			
		大分類(区分)	中分類(項目)		小分類(指標)
		DPに対応する評価区分	学務システムに得点を入力する評価項目「8つの力」		科目別にシラバスに記載する評価指標
尽心	誠実な態度と人間力(汎用的能力)	態度・志向	①誠実性	全学共通の説明文	科目の具体的な評価指標・能力
			②多様性	全学共通の説明文	科目の具体的な評価指標・能力
創造	高度な知性と創造力(専門的能力)	知識・技能	③知識	全学共通の説明文	科目の具体的な評価指標・能力
			④技能	全学共通の説明文	科目の具体的な評価指標・能力
	高度な知性と創造力(汎用的能力)	思考・表現	⑤思考力	全学共通の説明文	科目の具体的な評価指標・能力
			⑥表現力	全学共通の説明文	科目の具体的な評価指標・能力
実践	適切な行動と実践力(専門的能力)	行動・応用	⑦主体性	全学共通の説明文	科目の具体的な評価指標・能力
			⑧協働性	全学共通の説明文	科目の具体的な評価指標・能力

表4. 全科目共通のルーブリック (例)

	「学訓」 教育目標	学修成果の 評価項目 「8つの力」	例文	尺度				
				レベル5 (S:100~90点)	レベル4 (A:89~80点)	レベル3 (B:79~70点)	レベル2 (C:69~60点)	レベル1 (F:59点以下)
観点	尽心	①誠実性	○説明できる	○実社会で実践的に役立てることができる	○応用的な課題について、適切に説明できる	○基本は理解しており、説明できる	○獲得・修得に取り組んでいるが、説明できるレベルにない	○関心がない、またはその獲得・修得に取り組んでいない
		②多様性						
	創造	③知識	○活用できる	○実社会で実践的に活用できる	○応用的な課題について、適切に活用できる	○基本は理解しており、活用できる	○獲得・修得に取り組んでいるが、活用できるレベルにない	○関心がない、またはその獲得・修得に取り組んでいない
		④技能						
		⑤思考力	○行動できる	○実社会で実践的に行動できる	○応用的な課題について、適切に行動できる	○基本は理解しており、行動できる	○獲得・修得に取り組んでいるが、行動できるレベルにない	○関心がない、またはその獲得・修得に取り組んでいない
		⑥表現力						
	実践	⑦主体性	○期待に応えることができる	○期待以上に応えることができる	○期待に適切に応えることができる	○期待に多少応えることができる	○期待に応えるまでのレベルにない	○期待に相当応えていない
		⑧協働性						

表5. 科目別のルーブリック (例)

	「学訓」 教育目標	学修成果の 評価項目 「8つの力」	配点比率 (%)	評価指標・ 能力	指標・能力の 説明	尺度											
						レベル5 (S:100~90点)	レベル4 (A:89~80点)	レベル3 (B:79~70点)	レベル2 (C:69~60点)	レベル1 (F:59点以下)							
観点	尽心	①誠実性	10	……性	具体的な説明	具体的な説明	具体的な説明	具体的な説明	具体的な説明	具体的な説明							
		②多様性															
	創造	③知識	40	……力 ……性 ……力	具体的な説明	具体的な説明	具体的な説明	具体的な説明	具体的な説明	具体的な説明							
		④技能															
		⑤思考力									20	……力 ……力	具体的な説明	具体的な説明	具体的な説明	具体的な説明	具体的な説明
		⑥表現力															
	実践	⑦主体性															
		⑧協働性															

類の評価指標・能力が記載してある。

(4) ゼミナールのルーブリック

表6は、ビジネス・医療秘書コースのゼミナールのルーブリックである。中分類の評価項目は、8項目の中の4項目だけ記載している。配点割合は合計で100%になり、小分類の評価指標・能力が複数記載してある。

(5) 学修成果の配点割合

表7は、学修成果の配点割合の見本である。科目別に中分類の8項目に対して、合計が100%になるように配点の割合を入力する。なお、必ずしも8項目すべてに配点する必要はない。

(6) 学修成果の評価得点

表8は、学修成果の評価得点の見本である。科目別に中分類の8項目に対して、割り当てた配点

表 6. ゼミナールのルーブリック (例)

評価項目	配点比率 (%)	評価指標・能力	指標・能力の説明	尺度				
				レベル5 ※Sに該当の評価基準を示す	レベル4 ※Aに該当の評価基準を示す	レベル3 ※Bに該当の評価基準を示す	レベル2 ※C(単位取得基準)に該当する評価基準を示す	レベル1 ※F(単位取得不可)に該当する評価基準を示す
⑤思考	30	課題発見 課題分析	テーマに対する興味関心を持ち、論立てて課題を設定することができる 課題の関連情報探し出し、因果関係を見つけていく	※Sに該当の評価基準を示す テーマの意義や背景を他者に分かりやすく説明でき、質問に対する的確な回答ができる。	※Aに該当の評価基準を示す テーマの意義や背景を他者に分かりやすく説明でき、質問に対する回答ができる。	※Bに該当の評価基準を示す テーマの意義や背景を他者に説明でき、質問に対して的確な回答ができる。	※C(単位取得基準)に該当する評価基準を示す テーマの意義や背景を他者に説明できるが、質問に対しての回答が的確ではない。	※F(単位取得不可)に該当する評価基準を示す テーマの意義や背景を他者に説明できない。理解していない。
				※Sに該当の評価基準を示す 課題の関連情報の因果関係を理解し、かつ、本質を見出した上で、課題を解決できる。 課題に関連する事象・情報を整理して理論的に構造化でき、他者を納得させることができ、自分の意見や手順を論理的に展開できる。	※Aに該当の評価基準を示す 課題の関連情報の因果関係を理解し、かつ、本質を見出した上で、解決の方向性を認識できる。 課題に関連する事象・情報を整理して理論的に構造化でき、自分の意見や手順を論理的に展開できる。	※Bに該当の評価基準を示す 課題の本質や関連情報の因果関係を理解し、本質を見出せる。 課題に関連する事象・情報を整理し、構造化でき、自分の意見や手順を論理的に展開できる。	※C(単位取得基準)に該当する評価基準を示す 課題の本質や関連情報の因果関係を理解し、そこでから本質を見出そうと努力している。	※F(単位取得不可)に該当する評価基準を示す 課題の本質や関連情報の因果関係を理解できない、または見出せない。
⑥表現	40	プレゼンテーション力	複雑な事象の本質を整理し、自分の意見や手順を構造化し、論理的な展開ができる スライド資料が適切に作成できる、プレゼンテーションができる	※Sに該当の評価基準を示す 発表内容に照らして工夫したスライド資料を作れている。その結果、聴衆に内容がうまく伝わった手ごたえがある。	※Aに該当の評価基準を示す 文字の大きさを工夫し、図表やグラフも使っており、スライド資料の順番も問題ない。	※Bに該当の評価基準を示す 文字の大きさは十分だが、図表やグラフが少なく、聴衆にうまくPRできていない。	※C(単位取得基準)に該当する評価基準を示す 文字の大きさは十分だが、図表やグラフが少なく、聴衆にうまくPRできていない。	※F(単位取得不可)に該当する評価基準を示す スライド資料の文字が小さい、図表が少ないなど、聴衆にとってもわかりにくい。
				※Sに該当の評価基準を示す 聞き取りやすい大きさの声で、過度な抑揚と間のある話し方をしている。その結果、聴衆の興味を惹きつけられた手ごたえがある。	※Aに該当の評価基準を示す 聞き取りやすい大きさの声で、抑揚をつけた話し方や、間の使い方を工夫しようとしている。	※Bに該当の評価基準を示す 聞き取りやすい大きさの声で、抑揚をつけた話し方や、間の使い方を工夫しようとしている。	※C(単位取得基準)に該当する評価基準を示す 発表途中で、声が小さく、聞き取りづらいことがある。	※F(単位取得不可)に該当する評価基準を示す 終始、声が小さく、聞き取りづらい。
⑦主体性	20	主体性 コミュニケーション力	積極的にゼミの様々な活動に参加できる	※Sに該当の評価基準を示す ゼミ運営に積極的に関わり、運営の改善を提案できる	※Aに該当の評価基準を示す ゼミ運営に積極的に関わり、運営にも協力する	※Bに該当の評価基準を示す ゼミ運営に積極的に関わり、協力する	※C(単位取得基準)に該当する評価基準を示す ゼミ運営にあまり関わる気がなく、頼まれても協力しない	※F(単位取得不可)に該当する評価基準を示す ゼミ運営に関わる気が全くなく、できる限り何ももしないまま過ごす
				※Sに該当の評価基準を示す 自ら積極的に話しかけたり、相手からもよく話しかけられるなど、ゼミ生との信頼関係はしっかりと築けている。そのため、ゼミ生の中にも中心的存在になっている。	※Aに該当の評価基準を示す 自ら相手に話しかけたり、相手からもよく話しかけられるなど、ゼミ生との信頼関係はしっかりと築けている。そのため、ゼミ生との話し合いは問題なく行っている。	※Bに該当の評価基準を示す 自ら相手に話しかけたり、相手から話しかけられたり、ゼミ生との話し合いは問題なく行っている。	※C(単位取得基準)に該当する評価基準を示す 自ら話しかけることはないが、相手から話しかけられるば、話をしようとする。ゼミ生との話し合いは時々支障があるが、大きな問題は無い。	※F(単位取得不可)に該当する評価基準を示す 自分から話しかけることはなく、相手から話しかけられても話しようとする。ゼミ生との信頼関係を築けず、関係性が良好ではない。
⑧協働性	10	チームワーク	作業を分担して他者と協働できる。任せられた内容について責任をもって達成できる	※Sに該当の評価基準を示す 自分が意識を高め、様々な情報を判断し、その判断に基づいて責任をもって行動する。作業分担を行い、一部の人に負担をかけることなく協力して完成させた。	※Aに該当の評価基準を示す 任せられたことが本意でも、やるからには強い意識をもってやり切る。作業分担を行い、おおむね協力して完成させた。	※Bに該当の評価基準を示す 任せられたことは、責任者が切れる。作業分担を行って、他者がなるとか発表できる形に仕上げた。	※C(単位取得基準)に該当する評価基準を示す 任せられたことは責任者の指導の下で期限までにやり切れる。作業分担を行って、他者がなるとか発表できる形に仕上げた。	※F(単位取得不可)に該当する評価基準を示す 任せられたことを、期限までにやりきれない。作業分担も行わないまま、成果物も完成させることができなかった。
				※Sに該当の評価基準を示す ゼミ活動の目的、内容を十分理解した上で、ゼミ全体でそれらを共有しようとする力を持っている。また、話し合いの中で、方向性を意識しながら能動的に中心的にやっている。	※Aに該当の評価基準を示す ゼミ活動の目的、内容を理解し、話し合いや共同作業において、話し合いが円滑に進むよう努力している。	※Bに該当の評価基準を示す ゼミ活動の目的、内容などはある程度理解しており、話し合いや共同作業において、話し合いが円滑に進むよう努力している。	※C(単位取得基準)に該当する評価基準を示す ゼミ活動の目的、内容などは少しは理解しているが、話し合いや共同作業においては、基本的に他人任せである。	※F(単位取得不可)に該当する評価基準を示す ゼミ活動の目的、内容などを理解せず、話し合いや共同作業において、自分から全く意欲的に動くこととしない。

観点

表7. 学修成果の配点割合(例)

授業科目	授業区分	必修	選択	週あたりの時間数		学修成果の配点割合(%)								合計		
				1年次		2年次		尽心		創造					実践	
				前	後	前	後	① 誠実性	② 多様性	③ 知識	④ 技能	⑤ 思考力	⑥ 表現力		⑦ 主体性	⑧ 協働性
ビジネスデータ活用1	演習	1		2				30			60		10			100
ビジネスデータ活用2	演習	1			2			30			60		10			100
ビジネスデータ活用3	演習	1				2		30			60		10			100
社会心理学	講義	2			2			30		50		10	10			100
事務管理	講義	2				2					50	50				100
臨床心理学	講義		2			2		30		50		10	10			100
キャリアアップセミナー1	演習	1		1	1			50				20	20	10		100
キャリアアップセミナー2	演習	1				1	1	50				20	20	10		100
フィールドワーク	演習		1					10	10	10	10	20	20	10	10	100
病院実習	実習		2					10	10	10	10	20	20	10	10	100
インターンシップ1	実習		1					20	10	10	10	10	10	10	20	100
インターンシップ2	実習		1					20	10	10	10	10	10	10	20	100
インターンシップ3	実習		1					20	10	10	10	10	10	10	20	100
インターンシップ4	実習		1					20	10	10	10	10	10	10	20	100
プレゼミナール	演習	1			2			10	10	10	10	20	20	10	10	100
ゼミナール	演習	4			4	4		10	10	10	10	20	20	10	10	100
合計								370	80	180	310	230	210	100	120	

表8. 学修成果の評価得点(例)

授業科目	授業区分	必修	選択	週あたりの時間数		学修成果の評価得点(100点満点)								合計		
				1年次		2年次		尽心		創造					実践	
				前	後	前	後	① 誠実性	② 多様性	③ 知識	④ 技能	⑤ 思考力	⑥ 表現力		⑦ 主体性	⑧ 協働性
ビジネスデータ活用1	演習	1		2				28.5			52.3		10.0			90.8
ビジネスデータ活用2	演習	1			2			28.5			42.3		10.0			80.8
ビジネスデータ活用3	演習	1				2		28.5			32.3		10.0			70.8
社会心理学	講義	2			2			25.9		42.0		7.0	10.0			84.9
事務管理	講義	2				2					40.6	40.6				81.2
臨床心理学	講義		2			2		25.9		42.0		7.0	10.0			84.9
キャリアアップセミナー1	演習	1		1	1			43.0				16.0	16.0	7.0		82.0
キャリアアップセミナー2	演習	1				1	1	43.0				18.0	18.0	9.0		88.0
フィールドワーク	演習		1					10.0	8.0	9.0	8.0	15.0	18.0	7.0	9.0	84.0
病院実習	実習		2					10.0	8.0	9.0	8.0	15.0	18.0	7.0	9.0	84.0
インターンシップ1	実習		1					20.0	9.0	9.0	9.0	8.0	8.0	7.0	15.0	85.0
インターンシップ2	実習		1					20.0	9.0	9.0	9.0	8.0	8.0	7.0	15.0	85.0
インターンシップ3	実習		1					20.0	9.0	9.0	9.0	8.0	8.0	7.0	15.0	85.0
インターンシップ4	実習		1					20.0	9.0	9.0	9.0	8.0	8.0	7.0	15.0	85.0
プレゼミナール	演習	1			2			10.0	9.0	10.0	10.0	16.0	16.0	10.0	9.0	90.0
ゼミナール	演習	4			4	4		10.0	9.0	10.0	10.0	18.0	18.0	10.0	9.0	94.0
合計								343.3	70.0	158.0	239.5	184.6	186.0	78.0	96.0	

を上限として評価の点数を入力する。表7の配点
で除算することによって、全科目の8項目の学修
成果を算出することができる。

2.4 教学IRデータの可視化

学生から収集した学修成果に関する貴重なデー
タを、授業の改善に活用できる形に可視化して提
供しなければ、教育の改革改善にはつながらない。
以下に、IRデータの可視化の事例として、長崎
女子短期大学の「ディプロマサプリメント」と「学

生ポートフォリオ」の構想を示す。

(1) ディプロマサプリメントの構想

表9は、今後のディプロマサプリメント作成の
構想である。ディプロマサプリメントとは、直訳
すると「学位証書補足資料」のことで、一般的に
学生の学習に関するデータをグラフ等に可視化し
たものを指すようである。ここでは、いくつかの
先進事例を参考にして、考案したグラフの構想を
紹介する。

表9. ディプロマサブリメントの構想

	評価項目	グラフ化する指標とグラフの種類
休退学者の早期発見	満足度	満足度×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
	欠席数	欠席数×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
	学習時間(授業外学習)	学習時間×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
	労働時間(バイト/家事)	労働時間×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
	基礎能力(知能+学力)	基礎学力×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
	基礎能力の経年変化	基礎学力(1年)×基礎学力(2年)→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
学習成果の到達度の把握	学業成績の経年変化	GPA(全4期・総合)→折れ線グラフ(決定係数R ²)
	学業成績の評価分布	成績分布→積み上げ棒グラフ(S/A/B/C/Fの割合)
	学習成果のバランス	入学試験、短大(全4期・総合)→レーダーチャート
	学習成果の経年変化	入学試験、短大(全4期・総合)→折れ線グラフ(決定係数R ²)
	科目別の成績の比較	科目別の成績→棒グラフ
	科目別の授業評価の比較	科目別の授業評価アンケートの理解度・到達度→棒グラフ
	専門業者の標準化テスト	標準テストの能力に関する自己評価→積み上げ棒グラフ
	短大の在学生調査	入学時・在学時・卒業時調査の能力に関する自己評価→積み上げ棒グラフ
学生支援の満足度の把握	授業科目	「授業」の満足度×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
	資格取得	「資格」の満足度×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
	就職支援	「就職」の満足度×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
	教員との人間関係	「教員」の満足度×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
	職員との人間関係	「職員」の満足度×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
	友人との人間関係	「友人」の満足度×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
	施設・設備	「施設」の満足度×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²)
	総合的な満足度について	「総合」の満足度×GPA→散布図(学籍番号/決定係数R ²) ※「総合」の満足度:本学への入学を後輩に勧めたい度合

表10. 学修ポートフォリオの構想

区分	学生の個人情報
基本情報	学籍番号、氏名、写真、生年月日、住所、連絡先、チューター、保証人、家族構成、障がい等
高校時代	出身高校、内申点、調査書、欠席数、資格/検定、表彰/役員、部活
入学試験	受験番号、面接点、総合得点、学習成果
短大時代	科目別成績、取得単位数、GPA、学習成果、実習記録、欠席数、社会人基礎力/職業適性診断/基礎能力/職業興味志向/就職活動状況、資格/検定、表彰/役員、部活/ゼミナル、在学中の目標、趣味/特技、アルバイト、車の免許、面談記録、就活状況、就職先/進学先

(2) 学修ポートフォリオの構想

表10は、今後の学修ポートフォリオ作成の構想である。学修ポートフォリオとは、学生が授業で作成したレポートや論文、課題達成のために収集した資料や成績表などの学修成果と、学修の過程において学んだ点や気付いた点などを記録したものである。ここでは、いくつかの先進事例を参考にして、考案した一覧表の構想を紹介する。

以上が、筆者が考案した長崎女子短期大学のアセスメントプランの構想である。

3. 今後の課題と展望

今回、筆者が考案したアセスメントプランの構想は、まだまだ不十分ではあるが、この提案を基に、学生の学修成果を的確に捉え、教育の質の保証・向上、改革・改善に役立つことができれば幸いである。今後は、より有用性と利便性の高い評価システムの構築に取り組んでいきたいと思う。

一方、教育心理学の領域の自己調整学習理論の研究では、学修成果の規定要因として学習意欲を数多く取り扱っている。時間と労力を費やす学習者にとって、学習目的の有用性、学習方法の明確性、評価基準の明確性、評価結果の公平性、適切

なフィードバックは、学生の学習意欲を高める大切な鍵であると言える。このことを踏まえて、長崎女子短大では、今後、次のような課題に取り組んでいく必要がある。

①評価基準の共通言語である学科・コース共通のルーブリックを作成し、さらに、全科目別のルーブリックを作成する。これをシラバスに掲載し、各科目の初回の授業で学生に説明することで、各自に目標を設定させて学習意欲を高めるようにする。

②学修成果などの知的な側面のルーブリックのみならず、満足度・達成感・自己効力感・自己肯定感・自信・学習意欲などの情緒的な側面のルーブリックも作成して、より客観的な比較や分析ができるようにする。

③教学 IR データを多方面で活用し、学習支援と学生支援を充実させ、教育の成果を学内外に公表する。具体的には、エンrollmentマネジメント(EM)体制を確立し、IR データを二者面談・三者面談、学科・コース会議、FD・SD 研修会等で有効に活用する。

④学務システムの機能性・利便性・有用性が向上するように、教職員の意見や要望を収集して開発業者に依頼する。

⑤短期大学コンソーシアム九州(JCCK)など、他短大と共同で実施した共通調査のデータをベンチマークとして、本学の強み・弱みを明確にし、改善のための参考資料とする。

⑥卒業生の就職先の人事担当者と定期的な合同会議を開催して、産学連携の学修成果や人物評価の評価基準を策定する。

最後に、本学は令和8(2026)年度に第四期の認証評価を受審する予定である。今後は本稿で考察を試みた資料を基に、さらにブラッシュアップした根拠資料を準備して、第四期認証評価に臨みたいと思う。

参考資料

- 1) 江頭万里子・武藤玲路：秘書検定の学習意欲と自己調整学習に関する研究，長崎女子短期大学紀要，46，24～38（2021）
- 2) 中央教育審議会：教学マネジメント指針（要旨），中央教育審議会大学分科会，（2020）
https://www.mext.go.jp/content/20200206-mxt_daigakuc03-000004749_004.pdf
- 3) 土屋麻衣子：自主性・自己調整学習を促すフィードバック実践，福岡工業大学 AL 型授業推進プログラム，（2019）
<https://www.fit.ac.jp/ap/news/archives/39>
- 4) 日本高等教育開発協会：学修成果の評価から教育力向上に向けて動き出す，カリキュラムコーディネーター養成研修会・評価編テキスト，（2021）
- 5) 野阪拓海：「自ら学ぶ力」どうすれば育てられる？自己調整学習の専門家に聞く，朝日新聞 EduA 学習と健康・成長，（2020）
<https://www.asahi.com/edua/article/13340047>
- 6) 松下佳代：パフォーマンス評価による学習の質の評価：学習評価の構図の分析にもとづいて，京都大学高等教育研究開発推進センター，（2012）
- 7) 武藤玲路：長崎女子短期大学の自己点検・評価における学修評価システムの構築，長崎女子短期大学紀要，40，75～87（2016）
- 8) 武藤玲路：女子短大生の学習意欲に関する研究，長崎女子短期大学紀要，45，28～34（2020）
- 9) 武藤玲路：女子短大生の学習意欲に関する研究（2），長崎女子短期大学紀要，46，5～10（2021）

結び